二者関係におけるサポートの期待と受容の不一致の影響に関する研究

中村　佳子

広島大学大学院生物圏科学研究科

A study of effects of disparity between support expectation and receipt in dyadic relationship

Yoshiko NAKAMURA

Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University

序章　ソーシャル・サポート研究における問題点と本研究の目的

ソーシャル･サポート研究は､対人関係が個人の健康にいかなる影響を及ぼすのかについての関心から始まり、現在においても健康との関連性の解明に重点をおいた研究が多い。このためソーシャル･サポートがサポートの受け手と送り手との対人関係の継続に､いかなる影響を及ぼすのかについては、十分に検討されてきたとは言い難い現状である。しかしながら、ソーシャル･サポートの多様な効果の理解には､個人の健康面だけでなく､対人関係の継続への影響を検討する必要がある。また後者の検討を行うには､ソーシャル･サポートを対人関係のポジティブな要因としてのみ捉えるのではなく､対人関係の形成･維持を担う両価的な要因として捉える視点が必要である。こうした観点に立ち本研究はソーシャル・サポート過程のより総合的な理解を目指す。

これまでソーシャル･サポートは次の３つの観点から操作化されてきた。重要他者との関係の存在を扱う社会的包絡､サポートの利用可能性の評価である知覚されたサポート､実際に受けたサポートを評価する実行されたサポートの3つである。このうち知覚されたサポートと実行されたサポートとはサポートの送り手と受け手との相互作用過程においてその評価がなされるものである。本研究では継続する対人関係を扱うことから､これらの操作化のうち知覚されたサポートと実行されたサポートを取り上げその関連に着目する。

ソーシャル･サポートと対人関係の維持との関連の検討には、ソーシャル・サポートを個人の対人関係全般からではなく､サポート源ごとの個別の対人関係から二者間の相互作用として捉える必要がある。また対人関係における葛藤とソーシャル･サポートの効果との関連にも注目する必要があると考える。

さらに、ストレス対処過程でのソーシャル･サポートの効果性の捉え方を見直す必要がある。先行研究からソーシャル･サポートの主要な効果は個人の自尊心を維持あるいは高揚させることにあることが明らかにされている。とりわけストレス状況下でこの効果が発揮されやすい。なぜなら、ストレスによって不安定になったアイデンティティの支えとして､他者からのサポートが必要とされるから

広島大学総合科学部紀要IV理系編、第 28 巻 (2002)
*広島大学審査学位論文
口頭発表日：2002 年 2 月 19 日、学位取得日：2002 年 3 月 21 日

である。サポーティブな他者が多いほど多くのサポートを得ることができるといえるが、問題は他者のサポーティブ性の捉え方である。従来のソーシャル・サポート研究の多くは、知覚されたサポートの測定値が示すサポートの利用可能性の高さを他者のサポーティブ性としてきた。しかしこの捉え方では不十分である。ストレス対処過程ではソーシャル・サポートは異なる２時点で効果を発揮する。まずストレスの評価時に知覚されたサポートが効果を発揮し、ストレスの対処時には実行されたサポートが効果を発揮する。これら２つのサポートは効果を発揮する時点が異なるため、両者間に不一致が生じることがある。知覚されたサポート量が多くても、結果として得られたサポートが少ない場合には、人は必ずしもサポーティブな対人関係の中にいるとは言えない。すなわち従来のソーシャル・サポート研究の前提である「対人関係の存在＝サポートの存在」という捉え方は崩れてしまう。

　そこで、本研究では知覚されたサポートと実行されたサポートの効果を一連の過程の中で検討することを提案した。このことによりサポートのポジティブな側面だけでなくネガティブな側面にも注目することができる。本研究の具体的な検討では、知覚されたサポートが多く実行されたサポートが少ないという事態をサポートの期待はずれとし、この期待はずれがどのような影響を受け手の健康やサポート源との対人関係に及ぼすのかを明らかにしていく。データの収集は縦断的な調査により行い、調査対象者とサポート源との個別の対人関係の中でサポート量を測定した。

第１章　二者関係におけるサポートの期待と受容の不一致の影響

　本章ではまず、サポートの期待と受容の不一致がどのような影響を及ぼすのかについて検討した。調査対象者である大学生は父、母、旧友というつき合いの長いサポート源と大学入学後の新しい友人というつき合いの短いサポート源に対して、サポート提供に対する期待度と実際の受容度とを回答した。また同時に調査対象者の心理的健康とサポート源に対する信頼感が測定された。分析の結果、研究1-1では、旧友というつき合いの長いサポート源からのサポートが期待はずれであった場合に、個人の心理的健康が低下することが示された。研究1-2では、新しい友人というつき合いの短いサポート源からのサポートが期待はずれであった場合に、そのサポート源に対する信頼が低下することが示された。サポートの期待はずれによる悪影響の発現先はサポート源とのつき合いの長さに依存していることが明らかとなった。

　また、研究1-3ではサポートの知覚はサポート源に対する信頼の程度により影響されることが示された。研究 1-1・1-2 の結果と合わせ、ソーシャル・サポートが提供される過程は対人的な相互作用

[illegible]

トの期待はずれがもたらす悪影響の仲介要因から、悪影響の抑制要因へと機能を変化させることが示